

被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!
幅広いネットワークづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!
被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

史料ネット News Letter

第 38 号 2004 年 9 月 3 日 (金) 発行：歴史資料ネットワーク (神戸大学文学部内)



(写真上下とも)

2004 年 6 月 6 日 史料ネットシンポジウムの様子

目 次

巻頭言

「水害における史料ネットの役割を考える」
奥村 弘 …… 2

総会・シンポジウム特集

2004 年度歴史資料ネットワーク総会及び
シンポジウム「現代社会における歴史学、史料・文化財保
存 - 震災から 10 年、史料ネットの活動をめぐって - 」
総会の記録 松下 正和 …… 3
参考資料 …… 5
シンポジウムの記録 河野 未央 …… 11

「第 6 回『火垂るの墓を歩く会』実施報告」
辻川 敦 …… 15

見学記

「国立歴史民俗博物館
『ドキュメント災害史 1703 - 2003
地震・噴火・津波、そして復興』」
内海 寧子 …… 16

「News Letter 記事内容再考のお願い
~ News Letter をより楽しく読むために ~」
山田 修士 …… 17

「福井史料ネットワークの被災史料調査活動の現状
~ 水害による被災の特徴 ~」
松下 正和 …… 19

水害における史料ネットの役割を考える

奥村 弘

阪神淡路大震災後、歴史資料保全情報ネットワークとして活動を始めてから、9年半が過ぎました。被災地の歴史資料をすこしでも保全できればと考えて活動をはじめたころには、現在のようなかたちで活動が継続していくとは全く考えていませんでした。なぜ現在のような活動がおこなわれているのか。ニュース本号では、この9年を振り返り、課題を考えるシンポジウムの記録を載せました。ぜひお読みください。

この夏には、新潟や福井、愛媛などで大きな水害が起こりました。被災地の自治体やマスコミ、大学や歴史資料の関係者と連絡をとりながら、史料ネットもはじめて水害の際の歴史資料の保全活動に取り組んでいます。

水害は、地震以上の早さで被災地の歴史資料を失滅させます。かつて名古屋の水害の際、十分な活動が出来なかったこともあり、今回の水害についても活動できるかどうか呻吟していたのですが、会員の方から、今回はどうするのかという励ましを受け、活動を開始しました。新潟での早期の活動は困難でしたが、連絡を取り合い、現在は越佐史料調査会を中心に保全活動がすすめられています。愛媛での水害については、愛媛資料ネットと連絡をとりながら、対応をすすめています。

福井については、県の文書館、図書館、博物館、福井大学や敦賀短期大学の関係者との打合せを重ね、現地に福井史料ネットワークが立ち上がり、ここが保全活動の中心を担っています。今年度の総会で確認された大規模災害の際、早期に救援体制をつくるという方針をなんとか実行できたと考えています。その際、被災したところにおいて、史料保全を呼びかけることの是非が議論となりましたが、私の方からは、これまでの経験と先年の宮城地震での宮城資料ネットの歴史資料の保全でも被災者から支持を受けていたことを紹介し、現地の方々を励ましてきました。各地での経験とその共有が、新たな動きを作る際、重要な意味を持つことを改めて考えさせられた次第です。

福井では、救援活動にも参加しました。被災してから1週間以上たっても、市内の中心部で、アスファルトの道路の上の土砂が固まって消えない状況にはびっくりさせられました。また被災地では、蔵が浸水しても生活復旧のため十分整理が出来ず、そのままになった例も見てきました。夏の高温の中で、浸水した蔵の湿度は極めて高くなっているようで、直接水ぬれせずとも、文書が湿気で固まったり、カビが生えたりしやすい環境が、水害によって生まれるということを痛感させられました。福井や新潟の活動は現在も進行中です。会員の皆さんの様々な形でのご支援をお願いします。被災地での活動は様々な形があります。かならずしも専門性が高くなくともできることは多くあります。福井市に歴史関係の教室を持つ大学がないこともあり、現地では人手不足のようです。福井へ行ってほしいと思われる方は、事務局までご一報ください。

(おくむら ひろし、史料ネット代表委員)

2004 年度歴史資料ネットワーク総会及び
シンポジウム「現代社会における歴史学、史料・文化財保存
震災から10年、史料ネットの活動をめぐって」

2004年6月6日(日)、尼崎市立小田公民館にて、2004年度歴史資料ネットワーク総会・シンポジウム「現代社会における歴史学、史料・文化財保存 - 震災から10年、史料ネットの活動をめぐって -」が行われました。概要は以下の通りです。

2004 年度歴史資料ネットワーク総会

日時：2004年6月6日(日)13:00~14:30

会場：尼崎市小田公民館学習室2・3

(尼崎市潮江1-11-1-101、06-6495-3181、
JR 尼崎駅北東徒歩5分)

シンポジウム(上記総会終了後 14:40~17:00)

「現代社会における歴史学、史料・文化財保存 -
震災から10年、史料ネットの活動をめぐって
-」

奥村 弘氏(歴史資料ネットワーク代表委員)
「震災後10年間に新たに展開してきた状況や
課題について」

辻川 敦氏(尼崎市立地域研究史料館)

「この間の行政の動向について」

コメント 保立 道久氏(東京大学史料編纂所)

参加28名(会員27名)

委任状70名(議長69名、奥村弘氏1名)

総会の記録

総会を進行するにあたり、最初に総会議長として個人会員より関山麻衣子氏が選出されました(会場の拍手にて承認)。



次に事務局長の松下正和が2003年度の活動報告(参考資料1参

照)と決算報告(参考資料2参照)をおこないました。その後、会計監査委員の大村拓生氏による会計監査の文面を議長の関山氏が代読しました。

「6日の総会に出席できませんので、メールにてご報告させていただきます。5月27日・6月3日に史料ネット松下さんから提出された現金出納帳・通帳・領収書・郵便振替票・現金について、監査をいたしましたところ適正に会計処理が行われていると判断されましたので、それをご報告いたします。

ただし金融機関の現金が引き出されるまで、松下さんが立て替えられており、現金出納帳レベルではマイナスになっている期間がかなりの間、認められません。立て替えは混乱が生じやすく適切な状態とは思えませんので、改善が必要だと思われます。

また緊急基金が別立てで会計報告されているにもかかわらず、実際の現金出納では本会計と区別されていません。その点も改善すべきではないでしょうか。」

なお、史料ネットと神戸市文書館との「平成15年度緊急雇用促進特別交付金事業」については、担当者の添田仁氏より会計報告と事業成果報告(補足資料参照)がおこなわれました(会計監査については、神戸市文書館作成書類により代替)。



質問は特になく、2003年度活動報告と決算が、拍手により承認されました。

引き続き、2004年度活動方針案(参考資料3参照)と予算案(参考資料4参照)

を事務局長の松下が報告しました。

方針案について若干の字句の訂正がおこなわれた後、研究員制度の概要は、地域遺産の保存・活用の取り組みについての具体案は何か、それらの情報の公開はおこなわれるのか、遠方の災害への対応策は如何、特に一般会員向けへの情報提供のあり方はどのようにすべきか、総合史料調査は、2003年度と同じ業務委託の形態をとるのか、市民講座の今年度のプランはあるのか、災害時に連携可能な他団体はあるのか、埋蔵文化財問題についての取り組みは如何、という質問がありました。

これらに対し、史料ネットの企画に積極的に携わり、活動の中心となってくれる人を研究員と位置づけ、運営委にも必要に応じて参加してもらう予定。他の活用の仕方もあるだろうが、今年度は運営委の意見も聞きながら試験的に運用してみたい。事務局保管分の被災史料を市民ボランティアとともに整理や古文書の勉強会を行ったり、被災地の総合史料調査により得られた知見を史料ネットや神戸市文書館などのホームページに公開することも考えている。他にも史料の補修や史料内容の研究や勉強会など様々な活用法を会員のほうから積極的に提案していただきたい、遠方の被災地の場合、例えば昨年宮城の場合など、関西からどう参加・援助すればよいか難しく芸予ほど動けなかった。東京からボランティア派遣してもらうよう依頼もしたが、ほとんど派遣できなかった。十勝沖地震などは被害が少なかったこともあるが、各機関にFAXを送るにとどまった。遠方への関与の仕方や、会員へのレクチャーは今後の課題。判断に迷うことがあるので経験者がレスキュー入りすることも大切。九州で仮に災害が発生した場合、山陰史料ネットや愛媛史料ネットなどにもお願いすることもあるか。これまでの経験を冊子化してま

とめ、自治体や教委に災害への対応法を広めていきたいと考えている。'2004年度で終わる事業で、来年度以降については未定。事業も縮小しながら展開しているので今日の段階で予算や作業計画について報告できなかった。'現在、近世講座のシンポジウムがあり。具体的には、民間委託で揺れ動いている芦屋の美術博物館を市民と連携しながら応援していくという企画がある。'歴史学会では歴史学研究会や歴史科学協議会、歴史教育者協議会などの全国組織に呼び掛けている。カンパへの協力要請にとどまっているので、もう少し議論を深めたい。内閣府の「災害から文化遺産と地域をまもる検討委員会」へ史料ネット代表として奥村が出席しているので、これまでの経験を少しでも伝え、地域防災計画に文化遺産の規定を入れてもらうよう呼び掛ける。立命館大学歴史都市防災研究センターなどもあるが、これらとの連携の方法について運営委などで協議していきたい。'検討していきたい、と回答した。'については、フロアから史料調査会のような組織は全国的にもあるので、それらも含め防災の議論をするようにすれば、という提言もありました。これらの質疑の後、拍手をもって活動方針案と予算案が承認されました。

最後に、2004年度運営委員・会計監査委員が選出されました。個人会員としては、藤田明良氏・加藤宏文氏が会場の拍手により承認、選出されました。学会会員も含めた運営委員人事の正式決定は、9月1日の運営委員会にておこなわれました(参考資料5参照)

(以上文責、松下正和)



【参考資料1】 【歴史資料ネットワーク 2003年度活動報告】

1. 被災史料の整理や被災地での調査活動

事務局保管の資料整理は、院生・学生・市民などのボランティアによって進められた。神戸大学では11回の整理が実施され、のべ127名の参加で約4箱分が終了した。

4月からは機械的に整理作業を進めるだけでなく、参加者により古文書に親しめるように神戸大学文学部所蔵文書を利用したミニ学習会の時間ももった。

さらに神戸女子大学に移管された文書群は4箱分の整理が終了し、残りの整理は神戸大に場所を移して進行中である。

被災地の総合史料調査を引き継いだ神戸市緊急地域雇用促進特別交付金事業「市民から引き継いだ古文書整理等」事業は、神戸市文書館寄託のものを中心とした約5000点の古文書について目録化とデータ入力・写真撮影の作業を進めるとともに、

震災で被害を受けた神戸市長田区内西代協議会所蔵文書の再整理と保存・公開準備作業を、神戸市文書館において行った。さらに神戸大学文学部地域連携センターと神戸市文書館と史料ネットの三者の共同で神戸地域における被災史料についても整理・活用事業を行い、灘区・東灘区で調査を進めた。

2. 市民との連携を重視した地域史研究の取り組み

今年度の歴史講座は「シリーズ 歴史遺産を考える」と銘打ち、多彩な形態で4回を実施した。のべ231名の参加があり、研究成果の還元と共に地域の住民や文化団体との交流や意見交換に成果を上げた。

また、神戸大学医学部敷地内で出土した福原京関連遺跡の学術的価値を検討する緊急シンポジウムを成功させ、遺跡の保存に貢献した。

各学会より遺跡保存のための要望書が提出され学会誌上でも大きく取り上げられた。

さらに、シンポジウム「地域資料の保存と活用を考える」を共催したほか、下記の催しを後援した。

第10回	2003年6月14日	参加者	17名
第11回	7月12日	参加者	13名
第12回	8月30日	参加者	11名
第13回	9月13日	参加者	10名
第14回	10月11日	参加者	9名
第15回	12月13日	参加者	15名
第16回	2004年1月24日	参加者	12名
第17回	2月14日	参加者	10名
第18回	3月13日	参加者	9名
第19回	4月10日	参加者	13名
第20回	5月8日	参加者	8名

第1回 「中世の国際交流と兵庫津」

2003年9月27日(土) 13:30~16:30 @福厳寺 参加 54名

報告：藤田明良氏(天理大学助教授)「アジアのなかの中世兵庫津」、伊藤幸司氏(山口県立大学助教授)「国際交流と禅宗寺院」、共催：兵庫津の文化を育てる会、後援：兵庫区役所・神戸大学文学部地域連携センター、協力：巨龍山福厳寺

第2回 「地域遺産としての自然海岸」

2003年12月6日(土) 13:30~16:30 @深江会館 参加 48名

報告：坂江渉氏(神戸大学文学部地域連携センター主任研究員)「古代の浜辺と生活・信仰・伝承～西摂・神戸の松原海岸～」・友野哲彦氏(神戸商科大学助教授)「自然海岸の持つ経済的価値～環境経済学の立場から～」・共催：神戸大学文学部地域連携センター、後援：芦屋市教育委員会・神戸市教育委員会・西宮市教育委員会・兵庫県教育委員会

第3回 「兵庫津から神戸へ - ミナトと周辺の村々」

2004年3月27日(土) 13:30~16:30 @生田文化会館 参加 102名

報告：桑田優氏(神戸国際大学教授)「兵庫開港～近代神戸の始まり」、秋宗康子氏(KOKORO 和 KOBE)「須磨の村々と兵庫津」、後援：神戸市文書館、KOKORO 和 KOBE

第4回 歴史まちづくりトークサロン

2004年4月24日(土) 14:00~17:00 @伊丹郷町館・石橋家住宅 参加 27名

司会：石川道子氏・辻川敦氏、共催：神戸大学文学部地域連携センター

「シリーズ 歴史遺産を考える」以外の主催、共催、後援 企画

緊急シンポジウム「平家と福原京の時代～楠・荒田町遺跡の評価をめぐる～」

2004年1月10日(土)10:00～17:00 @神戸大学瀧川会館 参加184名

報告：須藤宏氏・岡田章二氏・高橋昌明氏・元木泰雄氏・佐伯真一氏

「淡河町の歴史と文化を考える」講演会

2003年7月5日&2004年1月25日 主催：淡河町自治協議会、淡河ふれあいのまちづくり協議会

第5回「火垂るの墓を歩く会」

2003年8月5日&9日 主催：「火垂るの墓を歩く会」実行委員会

<わがまち再発見>よみがえれ！白鳳の大伽藍「猪名寺麿寺市民フォーラム」

2003年9月21日 主催：自然と文化の森協会

第3回まちづくりシンポジウム「バーチャル富松城歴史博物館から見てきたもの」

2003年9月28日 主催：富松城跡を活かすまちづくり委員会

3. 震災記録保存と地域史料保存

2003年5月17日の総会に合わせてフォーラム「歴史資料の保存・活用と地域社会」を開催した。また、7月13日に大阪歴史科学協議会が実施した「阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター見学と検証のつどい」を共催し、9月23日に同センターでもたれた「第2回震災資料の保存・活用に関する地域連携研究会」に参加した。

さらに、11月29日にシンポジウム「地域資料の保存と活用を考える」を朝日新聞大阪本社、大阪歴史科学協議会、大阪歴史学会、(財)公害地域再生センター(あおぞら財団)、NPO法人西山卯三記念すまい・まちづくり文庫と共に催した。

4. 災害対策

2003年5月26日に発生した震度6弱の三陸南地震の対策のため、メーリングリストを立ち上げて情報交換にあたるとともに、被災地の関係者に「東北地震被災地の歴史資料・文化財関係者の皆様へ」(5月27日)、報道機関に「東北地震被災地に歴史資料・文化遺産への注意を喚起する記事掲載のお願い」(5月28日)を発信した。ほぼ同じ地域で7月26日に震度6弱の宮城県北部地震が発生した。これに対し、同28日に前回同様に地元と報道機関にお見舞いと被害確認依頼を発信すると共に被災自治体にもお見舞いと被害確認依頼を兼ねたアピールを発信した。8月1日には現地で被害の視察と対応の協議をおこない、同4日に神戸でその緊急報告会をおこなった。地元関係者も翌5日に「宮城地震歴史資料救済ニュース」の配信開始、10日に被害調査とレスキュー実施と動きを始め、9月初旬には宮城資料ネットが立ち上がった。当史料ネットでは、8月23日の2回目の調査レスキューにボランティアが参加したのを始め、募金の呼びかけや各方面への支援要請など現地と緊密に連絡を取りながら、その始動をサポートした。また各学会の協力(学会誌での告知・会場でのカンパ活動)により、募金は307,639円集まった(5月28日現在)。さらに9月26日におきた震度6弱の2003年十勝沖地震においても被災自治体にアピールを発送した。

一方、神戸大学文学部地域連携センター主催の第2回歴史文化をめぐる地域連携協議会「自然災害から地域の遺産を守る」(2004年3月7日開催)においてボランティア団体の役割についてコメントした。

また、近年発生が予想されている東南海地震対策として、災害からの文化財保護のためのネットワーク作りに着手した。内閣府における「災害から文化遺産と地域を守る検討委員会」で、京都における文化財レスキューのあり方がモデルケースとされていることをふまえ、その委員・関係者を中心に「京都における文化財防災研究会」を立ち上げた。史料ネットメンバーもその研究会に参加し、京都における災害発生時の文化財保護の問題について検討を行った。

5. 組織と運営

ホームページの整備をすすめ、各方面への情報発信の充実をはかった。関東大震災 80 周年記念集会（2003 年 8 月 30 日・31 日）では、「阪神淡路大震災と歴史学」と題し、史料ネットの活動について報告を行った。ニュースレターは、5 回（2003 年 6 月 26 日第 33 号、9 月 11 日第 34 号、11 月 26 日第 35 号、2004 年 2 月 16 日第 36 号、5 月 20 日第 37 号；ただし第 33 号は 2002 年度号）発行した。メールニュースは 2003 年 9 月より軌道に乗り 27 回を発信している。また総括集の出版に向けた出版社との交渉を開始した。この 1 年間の書籍販売実績は、計 170,917 円の売上（『神戸と平家』79 冊、シンポ記録集 32 冊、『史料ネット総括集』11 冊）があった。最後に 5 月 28 日現在の会員は 136 名・6 学会、サポーター 50 名、ニュースレター購読者 57 名である。

[参考資料 2]

【 2003 年度歴史資料ネットワーク決算報告（2003 年 5 月 3 日～2004 年 4 月 30 日）】

2003 年度収支決算

収入		支出	
前年度繰越金	978867	専従事務局員人件費	0
会費収入	755500	事務局行動費	220000
学会会員	38500	事務局臨時経費	101031
個人会員（一般）	509000	総会諸経費	38026
個人会員（学生）	29500	市民講座諸経費	130667
サポーター	129000	その他企画諸経費	103360
ニュースレター	49500	史料整理交通費等	76480
寄付金	91431	ニュースレター印刷代	27079
市民講座資料代	156300	ニュースレター郵送代	172084
市民講座懇親会参加費	37000	総括集印刷代	20475
書籍・記録集・総括集売上	170917	総括集出版準備金	0
雑収入	5522	図書雑誌購入費	8533
		備品消耗品代	93991
		予備費	1203811
計	2195537	計	2195537

決算（収入）

会費収入... 予算を大きく下回った。2002 年度実績と比較すれば、学会会員は 5000 円増、個人会員（一般）は 176000 円減、個人会員（学生）は 28000 円減、サポーターは 9000 円減、ニュースレターは 38000 円減であった。この理由として、会計年度の区切りが 2002 年度が 2002 年 4 月 8 日～2003 年 5 月 2 日であったのに比べ、2003 年度は 2003 年 5 月 3 日～2004 年 4 月 30 日と期間が短かったこと、2002 年度は 2003 年度会費を前払いした会員が多かったこと、納入率が若干下がっていることがあげられる。

学会会員会費の内訳は、歴史学研究会（12500 円）、日本史研究会（10000 円）、大阪歴史学会（10000 円）、歴史科学協議会（5000 円）、京都民科歴史部会（1000 円）。

個人会員（一般）の内訳は、のべ 102 人分（101 人×5000 円＋1 人×4000 円）。

個人会員（学生）の内訳は、のべ 12 人分（11 人×2500 円＋1 人×2000 円）。

サポーターの内訳は、のべ 43 人（43 人×3000 円）。

ニュースレターの内訳は、のべ 50 人分（49 人×1000 円＋1 人×500 円）。

寄付金... 市民講座などの機会に集めた分や、会費振込の際にいただいた分など。予算を大きく上回った。

市民講座資料代... 古代・近世・平家シンポは 1 部 500 円、中世講座・伊丹トークサロンは 1 部 100 円の実費を徴収した。

市民講座懇親会参加費... 講座修了後に開いた茶話会は中世・近世講座のみ。よって予算を大きく下回った。懇親会参加費は収支あい償う状況である。

緊急対応基金のみの収支決算

収入		支出	
前年度繰越金	1000000	旅費	145950
寄付(旅費返還、奥村)	48650	食費	2073
宮城カンパ収入	307639	郵送費	2740
		宮城カンパ支出	300000
		次年度繰越金	905526
計	1356289	計	1356289

書籍・記録集・総括集売上...内訳は、『神戸と平家』79冊、シンポ記録集32冊、『史料ネット総括集』11冊である。
決算(支出)

専従事務局員人件費...予算を計上していたが、適任者・希望者がいないため、また会費収入が少なかったため置かなかった。

事務局行動費...2003年5月～2004年4月まで、一人一月5000円支給(ただし、松下は2004年4月分、河野は2003年8月分、2004年4月分、堀田は2004年5月分を支給せず)。

事務局臨時経費...ニュースレター発送時の臨時バイト代やその他郵送料など。

総会費諸経費...会場費や講師謝礼、スタッフ高越費など。

市民講座諸経費...中世講座・伊丹企画は会場費がなかったために予算を下回った。

その他企画書経費...西代シンポ、平家シンポの費用。

史料整理交通費等...毎月一回開かれている史料整理の際に支払われる交通費・昼食代。

ニュースレター印刷代...コピー用紙代、発送用封筒の費用。

ニュースレター郵送料...33号～36号の計4回分の費用。なお今年度の途中からクロネコメール便に変更。経費の削減に努めた。

総括集印刷代...『史料ネット総括集』の増刷代金、用紙代など。

図書雑誌購入費...『神戸と平家』などの購入費用。

備品消耗品代...文具など。

【参考資料3】 【歴史資料ネットワーク 2004年度活動方針】

1. 被災史料の整理や被災地での調査活動

阪神・淡路大震災後の救出活動で保全された歴史資料のうち、事務局保管の未整理分について引き続き院生・学生・市民などのボランティアを中心にした作業を進める。また、過去に救出・調査した被災史料の現状の把握と今後の活用をはかるために、追跡再調査を含めた総合史料調査を、引き続き神戸市文書館や神戸大学文学部地域連携センターと協力して進める。

2. 市民や自治体との連携を重視した地域史研究や地域遺産保存・活用の取り組み

歴史研究の成果や地域遺産の活用に関する市民と研究者の交流の場としての「歴史講座」を今年度も実施する。また関係諸学会・大学や研究機関等とも連携し、地域史や史料保存・活用などの研究成果の蓄積をめざす。さらに、地域史の掘り起こしや地域遺産の活用をはじめ、地域の歴史・文化に関わるさまざまな市民・自治体の取り組みへの積極的な連携や支援を継続していく。

3. 震災記録保存と地域史料保存

関係団体や市民との連携と意見交流をはかり、阪神・淡路大震災の資料保存と記録化・活用に関する研究会を今年度も引き続き開催し、「シンポジウム 地域資料の保存と活用を考える」実行委員会に積極的に協力する。また人と防

災未来センターをはじめ、災害史などこの分野に関する研究会や展示企画への参加や見学を行うとともに、資料保存の必要性について行政への働きかけを続ける。

とくに今年度は史料ネット事務局に保存されている史料ネット活動に関する資料の整理を行う。

4. 災害対策

山陰・愛媛・広島・山口・宮城の各史料（資料）ネットをはじめ、各地の関係機関・団体との交流と連携を継続する。また、東南海大地震のような大規模災害対策の研究と準備を関西で引き続き行うとともに、「京都における文化財防災研究会」などの活動を援助する。各自治会の地域防災計画で地域遺産の保全をはかるなどのはたらきかけを行う。さらに、新たに大地震などの災害が発生した場合には、情報把握や関係機関・団体・研究者の連絡にあたり、臨機応変に緊急対応基金を活用して救援体制の立ち上げを積極的に支援する。

5. 組織と運営

ホームページによる各方面への情報発信の充実を引き続きはかる。ニュースレターは定期刊行を維持するとともに、内容の充実をめぐる。また昨年度、軌道に乗ったメールニュースの配信を維持し、企画や活動のアウトラインをすばやく伝える。既発行の書籍・報告集については、引き続き頒布努力をおこなう。さらにニュースレター購読者の会員加入を呼びかけるなど、会員やサポーターの拡大に積極的に取り組む。

関係諸学会との連携をより一層深め、企画の共催や後援を行い、その成果を各学会の誌面上に反映させる。

さらに、新たに研究員制度を導入し、史料ネット活動の充実化をめざす。なお、この研究員制度の具体的な活用法については今年度以降検討することにする。

【参考資料4】

【2004年度歴史資料ネットワーク予算】

緊急対応基金

収入		備考
前年度繰越金	1203811	
会費収入	1000000	
学会会員	40000	
個人会員（一般）	650000	130人×5000円
個人会員（学生）	100000	40人×2500円
サポーター	150000	50人×3000円
ニュースレター	60000	60人×1000円
寄付金	50000	
市民講座資料代	100000	40人×500円×5回
市民講座懇親会参加費	100000	20人×1000円×5回
書籍・記録集・総括集売上	200000	
雑収入	5000	
合計	2658811	

収入		支出	
前年度繰越金	905526	次年度繰越金	905526
計	905526	計	905526

支出		備考
専従事務局員人件費	1000000	
事務局行動費	180000	3人×5000円×12ヶ月
事務局臨時経費	120000	
総会諸経費	40000	
市民講座諸経費	140000	35000円×4回
その他企画諸経費	100000	
史料整理交通費等	120000	10000×12回
ニュースレター印刷代	30000	
ニュースレター郵送代	180000	
総括集印刷代	40000	
図書雑誌購入費	100000	
備品消耗品代	100000	
予備費	508811	
合計	2658811	

【参考資料5】 【2004年度役員・運営委員・会計監査委員一覧】(敬称略)

(6月6日総会にて決定、一部9月1日運営委で変更)

〔役員〕

代表：奥村弘

副代表：藤田明良

事務局長：松下正和

〔運営委員〕

佐賀朝・石田真樹美・吉川潤(大阪歴史科学協議会)

吉村真樹子(大阪歴史学会)

松下正和(京都民科歴史部会)

大国正美(神戸史学会)

石黒志保・高松雪枝(神戸女子大学史学会)

奥村弘(神戸大学史学研究会)

添田仁(日本史研究会)

藤田明良・加藤宏文(個人会員代表)

〔会計監査委員〕

鎗山善理子・北泊健太郎

〔補足資料〕 【神戸市文書館との共同事業実績報告及び決算書】

別添様式1号
平成16年3月31日
神戸市長 矢田 立耶 様

住 所 神戸市灘区六甲台町1-1
神戸大学文学部地域連携センター受付
委託者(乙) 歴史資料ネットワーク
代表者 奥村 弘

業務実績報告書

委託業務名	市民から引き継いだ古文書整理等
委託期間	平成15年5月1日から、平成16年3月31日まで

附属業務の委託契約書第11条第2項の規定に基づき、下記のとおり業務の実績を報告します。

記

1. 事業費実績

事業費	6,499,226円
上記のうち人件費	6,064,470円
うち新事業等の実施等に供する人件費	4,971,030円

2. 雇用実績(本業務であることの確認できる書類(本誌)を添付のこと。)

区 分	前年度中に新規雇用し、本年度中に雇用期間を満了する者の数	本年度中に新規雇用し、本年度中に雇用期間を満了する者の数	本年度中に新規雇用し、本年度中に雇用期間を満了する者の数
当該業務に就任した全労働者数	人	9人	人
上記のうち新規に雇用した労働者数	人	8人	人

3. 新規雇員の募集方法(公共職業安定所を通じて募集等、具体的に記入すること。)

全て、職業安定所の紹介による
同時に、歴史資料ネットワークによる情報交換等により、募集広報と必要な人材の確保を図る

決算書

1. 人件費に関する結果

*賞与	基本給	13,000 × 8人月 =	1,040,000 円
	歳出	10,000 × 187人月 =	1,870,000 円
	歳入	7,600 × 27人月 =	2,052,000 円
	歳差	3,000 × 8人月 =	240,000 円
			1,440,000 円

*平均 交通費 801,000 円

*労災保険 <(賃金 × 半額) × 0.005> 301,700 円

人件費合計 3,084,700 円

2. 物件費に関する結果

*リノベーション料	88,000 円	
*移動カー(1 × 150)	27,000 円	
*写真機(1台) × 1台 + 消耗	26,010 円	
*CD-R(× 100) × 2枚 × 100	11,400 円	
*CD-R(× 40) × CD-R(× 40)	4,200 円	
*史料複製印刷料(× 4)	4,410 円	
*史料写真フィルム(100 × 20) + 渡郵輸	13,125 円	
*PC(× 20)	800 円	
*CD-R(× 100)		
*CD-R(× 100)	17,800 円	
*CD-R(× 100)	1,575 円	
*CD-R(× 100)	17,500 円	
*CD-R(× 100)	200,000 円	
*事務費	6,064,470 × (224,700 / 1,940,210) =	224,700 円
物件費合計		424,704 円

3. 総計 3,489,224 円

平成16年 3月31日
神戸市灘区六甲台町1-1神戸大学文学部内
地域連携センター受付
歴史資料ネットワーク
(代表) 奥村 弘

平成15年度特別会計収支(14051)

収入	特等図書図書費	388,844
	神戸市緊急雇用促進特別交付金事業	8,500,000
	利息	0
計		8,888,844
支出	神戸市緊急雇用促進特別交付金事業(特別費)	8,201,451
	(内訳) 人件費	6,984,471
	旅費(交通費・印刷費)	204,415
	雑費(印刷費)	774
	燃料費二分(4回)	46,000
	水料費二分(4回)	46,000
	電料費二分(4回)	46,000
	燃料費二分(4回)	46,000
計		8,423,056
繰越		465,788

当年度は内
 部平成15年度1月～6月分現金収支140万は未納
 災害対策不足分1,448円は未納

平成15年度緊急雇用促進特別交付金事業事務費

1. 収入

事務費 294,756 円

2. 支出

・のり付ラベル代金送込手数料	105 円
・防湿カード代金送込手数料	100 円
・レンタルパソコン代金送込手数料	315 円
・事務文書費	1,000 円
・給与振込手数料	2,885 円
	4,415 円

3. 繰越

平成15年度事務費残高 290,341

神戸市文書館様

平成15年度緊急雇用促進特別交付金事業成果報告

1. 岡田家文書
 - ・カード収録 5034 点 (1209～17218) 箱25通中～46
 - ・データ入力 8034 点 (8801～14867)
 - ・デジタルカメラ撮影 8030 枚 (8801～7887) CD-R-1～7
2. 西代協賛会所蔵文書(近代分)
 - ・カード収録 (1～186/1～73)
 - ・データ入力
3. 御影長瀬家文書
 - ・カード収録 512 点 (1～186)
 - ・データ入力
 - ・デジタルカメラ撮影 CD-R-1～8
4. 八尾家文書
 - ・カード収録 (1～428)
5. 浅井家文書
 - ・カード収録 (1～40)
6. 西濃徳信協賛会所蔵文書
 - ・カード・データ修正 (1881～2848)
 - ・デジタルカメラ撮影 (1～700) CD-R-1～23
7. コマーンシャルレポート
 - ・データ入力 (1989～1992年分)
8. 諸家・団体所蔵文書目録修正
 - ・高山家、近木家、石山家、赤上家、水屋家、井原家、飯上家、西田家、飯田家、徳田朝伊家、松尾仁高家、井上屋台門家、八尾家、朝新村文書、上原櫻井屋敷文書

平成 15 年 3 月 31 日
 神戸市西区六甲台町1-1神戸大学文学部
 地域連携センター 兼付
 歴史資料ネットワーク
 (代表) 高村 弘

シンポジウムの記録

総会に続き、シンポジウム「現代社会における歴史学、史料・文化財保存」が開かれました。史料ネット運営委員（大阪歴史科学協議会）である佐賀朝氏がシンポジウム司会を担当されました。

最初に奥村弘代表委員から「歴史資料ネットワークの10年 日本社会の中で私たちは地域の歴史遺産といかに向き合ってきたのか」と題する報告がありました。これは、10年目の節目にあたり今後の活動のあり方を模索していくにあたり、もう一度史料ネットの活動の原点から振り返ることによって、現在の史料ネットの組織の性格を見つめ直し、今後の活動につなげていくことを目的としたものです。講演では、最初に阪神・淡路大震災直



後被災地において地域に生きる人々の歴史を未来に伝えるために、歴史に関係するものはどのようなことができるのか、という問いこそが史料ネットの活動の原点であったと振り返り、さらに現在の史料ネットが「走りながら考える」柔軟な（悪く言えばあいまいな）活動・組織形態をとっている理由として、発足当初、史料ネットの活動や組織についての見通しが全く立たず、それゆえに地域社会と直接向き合っていく中で方向性を模索してきたという史料ネットの活動経緯があったことを述べられました。さらにそのことと関係して、これまでの史料ネットの活動は、現代日本社会の歴史意識を現場から考え、それを共有化しようとする試みであったとの性格付けをされました。史料ネットの活動については、地域の人々に受け入れられるのかどうか、という

不安を抱えつつスタートさせたが、こうした予想に反しおおむねにおいて地域の方々から協力と理解が得られたこと、また宮城県北部連続地震の際の宮城資料ネットの活動においても同様の状況であったことを紹介し、現代日本の市民社会において、歴史文化に対する関心・力量の高まりを見られることを指摘、今後は地域歴史遺産の保全・活用のなかでそうした市民の歴史意識にどのように接近していくのが課題であるとされました。

最後に、昨年度からの自治体、大学、N G Oなどの動向を総括し、現在が地域住民とともに新たな歴史文化空間を構築できるのかという境目であり、新たな若い感性のなかでの新たな運動の模索をする必要があるとして講演を締めくくられました。

次に辻川敦氏から「この間の行政の動向について」と題して、芦屋市立美術博物館の存廃問題を中心に現在の行政の動向についての報告がありました。最初に、芦屋市立美術博物館の存廃問題は、つきつめると館自体が市民にとって必要なものであったのか、という問題



でもあり、他の博物館の間でもこれまでそのようなアプローチを積極的に地域に対して行っていたか、という反省材料として受け止められていることを紹介されました。そして芦屋の事例は突出してはいるものの全体として財政難や行政改革が進められるなかで、各自治体の美術館や博物館組織は縮小され、N G Oや民間委託の方向に進んでいるのが現状であること、またそうした動向については市民参画の可能性が広がるという点では否定するものではないが、その一方でサービスそのものや運営理念、ボランティアのあり方についての議論が等閑にされたまま、財政難という直面する課

題への安易な問題解決として推進されていることに対しては危機感を持っていることなど



を述べられました。こうしたなかで史料ネットが、ボランティアによる史料保全活動の主導、すなわち行政への働きかけという側面から全国的にもひとつのモデルとなったこと、またまちづくりなど地域の現実的な課題に様々に取り組みつつ活動を継続させてきたことについては評価ができることとされました。最後に、今後は市民のニーズに応えることができるかどうかという点が行政組織の存続においては大きな問題となってくるのであり、博物館などの施設がどのような社会的役割を果たしていくことができるか、という点がポイントとなるとされました。

次に、東京大学史料編纂所の保立道久氏が、被災地以外の地域に住む歴史学者として、歴史資料ネットワークの活動の意義をどのように受け止めたか、という点について中世の遺跡保存問題に関わった経験をふまつつコメントを述べられました。保立氏は、史料ネットのこれまでの活動について、持続的な活動の中で社会的な力が構築されてきていること、アカデミーと市民社会の協力関係・相互関係が構築されていること、歴史学会に全国的・全体的な問題提起を展開したことなどは、全国的にみてもあまり例の無いこととであり、評価できる点ではないかとされました。なかでも「地域遺産」という考え方が生まれ、そのもとで専門家・市民・学生など立場を問わずいろいろな立場の人が集い、協力関係を築いてきたことは、歴史に対する問題認識が希薄になってきた人文科学や社会科学など近接する分野に対し、歴史的思考や歴史学のもつ意味の重要性を訴えるという点で

大きな意味を持つことを指摘されました。また自身が勤めている史料編纂所において、WEBによる史料情報の公開・共有化が進められているが、こうしたネットワーク構築の一端を担う場合にはやはりそれを支え、必要とする「地域」がなければならないこと、そうした地域社会との接触のあり方が今後の課題であるとされ、またこうしたネットワーク構築作業を、今後統一性をもって計画的に作り上げていく時に、史料ネットが提起した問題は大きな意味を持っているとして締めくくられました。

続く質疑では、最初に会場から東京・関東近辺で行なわれている史料保存活動についての簡単な紹介がありました。続いて市沢哲氏から、歴史文化に対する市民社会の力量が高まっているという奥村氏の発言に対し、辻川・保立の両氏はどのように考えているのか、という点について質問があり、続けて藤田明良氏からそれらを市民のニーズとしてとらえたときに、ニーズに応えながらの活動自体持続させていくことが難しいものであるが、持続させるポイントがありました。最初の市沢氏の質問に対して、辻川氏からは、本来行政主導であったまちづくりに市民が参画するようになった事例などをふまえながら、そもそも市民の側に潜在的にあったニーズが、ようやく具体的に現れるような社会になったのであり、奥村氏はその面をとらえて「力量の高まり」としたのであろう、とされ、しかし「力量の高まり」として評価するにはまだまだ弱いとの印象を受けるとされました。保立氏も歴史教育を行なう教師の力量が落ちている点などを指摘され、辻川氏と同様の印象を持っているとしながらも、今後市民社会の力量は高まっていく可能性は十分あり、歴史家としては新しい歴史像・説得的な歴史像をどのように提示していくのが問題

となる、とされました。両氏の発言を受けて奥村氏は、社会自体が受け止める力があるということと、それが歴史研究者が期待するようなかたちとして受け取られているか、ということは別の問題として考えなければならないとしたうえで、「力量」として認識するうえで大事な問題となってくるのは、震災など様々なことに対して記録化するといったような、個人・地域の問題や自分たちの経験したことを次世代に継承させたいという思いであり、(市民の側のこの思いの高まりによって)歴史研究者と地域の方と議論する土壌ができたのではないかとされ、今後どのように互いが歩み寄っていくのが問題となるとされました。奥村氏の発言を受けて市沢氏は、「力量の高まり」は、市民の歴史に関する関心の持ち方の変化と考えた場合、新しい動きであるのでとらえること自体が難しいとの感想を述べ、さらに藤田氏からも歴史研究者と地元の人々の歴史認識のすりあわせが難しいことを経験に基づきながら述べられました。

続いて土佐舜成氏から、震災後外国人記者の取材体験をもとに、日本の危機管理体制構築の遅れについて述べられ、これにより、行政の役割をどのように考えればよいのか、という点に議論が移りました。保立氏はボランティア組織のあり方など具体的な事例をあげながら欧州では、人命・モノを守ることについて稠密な風呂敷ができており、保守主義の一番いい側面ができていて、それが社会の文化となっていること、日本社会ではこうしたものがうまく組織されず、戦前から守られてきた一種の保守主義も近年崩れてきていることなどを指摘され、歴史学においてこうした保守性はとても大事であると述べられました。

また、山田修士氏から、一般市民からみれば、歴史資料館などはあまりなじみがなく認識も薄いので、逆に歴史資料館として

は市民の側にどういう関心をもってもらいたいか、という質問がありました。これに対し辻川氏は、図書館の事例をあげながら、史料館としては一人一人、自分のテーマを持って来館される方に対し、専門性をもってそれに応えられるような対応を心がける、市民の側がそうした対応について評価してくれば、行政の側の認識も変わっていくのではないかと述べられました。

ここで司会から、保立氏のコメントのなかであげられた史料情報の共有化とその実践の問題についてのコメントを会場に求め、会場から天草史料調査会での実践例について紹介がありました。最後に司会からコメントを求められた大国氏は、史料ネットの10年を振り返ったときに、一番印象的なのは大学・行政・市民のひとつひとつの分野ではできないことが、ネットワークを広げることによってできるようになったことであり、市民の「力量」については、大学の中だけではこれまで見えてこなかった市民の活動が顕在化してきたことのあらわれであると考え、とされ、地震後各地で史料ネットができたことは、阪神での経験があったからこそであり、その意味合いは大事であると述べられました。また行政と市民との関係については、今までは歴史家は

歴史像を提示し、博物館はそれらを展示し、市民は受け取るといったような役割分担があり、市民に対して一方通行の情報伝達であったが、それを双方向に変えることが大事であり、双方向の中で行政と市民がそれぞれ役割分担を果たしていかなければならないとされました。そして今後の10年というのは財政上の問題から地方自治体ができる範囲はどんどんせばめられていくと考えられるため、より積極的な市民の参画は必要となるが、歴史家も歴史像の提示のみでは結果的に「安上がりな委託論」に手を貸すようなことになるのではないかと、だからこそ今後「安上がりな委託論」に終わらないために、市民がどのようなことをやりたいのか、ということ育てるような枠組みを作る必要があると締めくくられました。

論点が多岐にわたりましたが、大国氏のとめにもありますように、総じて行政・市民・歴史家のそれぞれの役割を問い直すという観点からの議論となり、限られた時間の中ではありましたが、充実した討論を持つことができました。

(以上文責、河野未央)

新聞報道 (神戸新聞社提供)

「史料ネット」は一九九五年二月、震災の被災した歴史資料の救出を目的に、研究者や学生を中心となって結成された。震災から十年になるの目前に、同ネット代表委員の藤村弘一・神戸大助教授が活動を説明。史料救出のうえで、市民の積極的な協力を得る目標に掲げた。

その上で藤村助教授は「歴史像を提示し、地域の歴史や歴史体験を未来に伝えようとする市民側の意識が育つ」と歴史学座長の平山文彦氏も「市民側が歴史学を『歴史像』をつくる力を持つようになった」と強調した。

続いて尼崎市立地域研究史料館の辻川義久氏が行政が主導してまちづくりをする場合でも、地域の歴史を尊重し、市民と行政、専門ボランティアが連携するようになったら、こうした「絆」から新しい歴史学が育つとの期待を示した。

だが、一方で「歴史文化の担い手が民間に移るにはよいが、その補償には行政の財源がある。文化行政が一方的に切り離されるような流れがある」と平山、問題点も押し寄せてきた。

また「歴史学が生涯学習のために、どのよう多くの市民に支持を広げるか」との問いが投げられた。

会場からは「学者がくつろいだ歴史学講座などで、講座に投げ込む方法には限界がある」との意見も、史料館側も「研究者は地域と向き合う力が弱かった。それが、市民が求めるニーズに反応できない状態を生んでいて」と指摘した。

これを受けて、保立直久・東京大史料調査会副会長が

新しい歴史学の可能性探る 市民との双方向性を重視

「史料ネット」尼崎でシンポジウム

「市民側として説得力のある歴史像を、『歴史学が地域づくりの担い手になる』など、積極的な市民社会とのかわりを探求した。

一連の議論は歴史学の方法論にかかわる。研究者から市民へという一方の歴史学から、市民と共に歴史学をつくり上げる双方向の活動が重視する」という今後の方向性が浮かび上がった。

歴史学の分野を盛り込んだシンポジウムは尼崎市立地域研究史料館で開かれ、同市立小島公民館開いた。阪神・淡路大震災の被災地で直接市民と触れ合った史料ネットの活動経緯も、そこからは新たな「新しい歴史学」の可能性へと議論が進んだ。(仲林智史)

『神戸新聞』
2004年6月28日付
朝刊 文化面

第6回

「火垂るの墓を歩く会」実施報告

辻川 敦

新聞報道

(神戸新聞社提供)

- 日 時** 2004年8月4日(水)
および7日(土) 午前9時30分～12時
(2日間とも同じプログラムで実施)
- コース** 午前9時30分 阪神御影北側集合
石屋川公園(火垂るの墓モニュメント)
御影公会堂 御影高校 成徳小 JR六甲
道(解散)
- 主催** 火垂るの墓を歩く会実行委員会
- 協力** 歴史資料ネットワーク
- 参加者** 4日 約40人 5日 約50人

〔6回目となる「火垂るの墓を歩く会」〕

火垂るの墓を歩く会が発足したのは、6年前の1998年のこと。尼崎市立地域研究史料館が主催する「『尼崎市史』を読む会」世話人メンバーから出されたアイデアをもとに、毎年夏に野坂昭如氏の小説『火垂るの墓』に描かれた舞台を歩きながら、阪神地域における戦争の歴史を学ぼうという企画である。史料館や「『尼崎市史』を読む会」の有志メンバーが中心となって、実行委員会形式で実施してきている。

見学コースとしては、満池谷・ニテコ池コース、夙川・香櫨園浜コース、御影コースという3コースを設定し、順に実施している。今回は第6回目ということで、2巡目の最後として御影コースを歩いた。例年どおり告知・申し込み受付などの面で、史料ネットの全面的な協力を得た。

〔見学会の実施内容〕

毎回の経験をふまえて、この企画はかなりスタイルが固まってきている。今回も、

「火垂るの墓」を訪ねて
50人 ゆかりの地を見学



神戸・阪神間を舞台に、作家野坂昭如さんが自身の戦争体験を基にした小説『火垂るの墓』ゆかりの場所を歩く会が、四日、東灘区内であった。約五十人が参加し、御影公会堂などを訪れたほか、被災者の体験に耳を傾けた。

「尼崎市史」を読む会
阪神御影駅から石屋川

同日参加可、午前9時半、

九歳のとこ、御影で空襲に遭った加古川市の清水町子(水心)は「戦後の焼け跡、公会堂で授業を受けた日思い出した。当時の体験は、平和を願うの気持ちの原動力で」と力を込めた。歩く会は7日もある。

『神戸新聞』
2004年8月5日
朝刊 神戸面

「例年どおり集合場所にて説明資料を配付し、実行委員会メンバーの引率と解説によりコース見学を開始。御影は、小説筆者の野坂氏が実際に戦争当時住んでおられ、空襲に罹災した場所である。小説・アニメのなかでも、焼夷弾空襲の中主人公一家が逃げまどい、石屋川沿いに隠れる場面や、焼け跡のなかにぼつんと御影公会堂が焼け残っている場面が描かれている。こういったスポットを、順に見学していく。

途中、御影高校視聴覚室にてビデオの一部を見ていただきながら、全体的な解説を行なったのち、ふたたび出発。主人公兄妹の母親が、大やけどを負ってかつぎこまれ亡くなった国民学校のモデルであるところ

の、成徳小学校を見学の後、JR六甲道まで歩いて解散した。

【催しを終えて】

毎年、児童・生徒向けとうたっている企画であるが、今年は例年にまして、児童・生徒とその保護者よりも、野坂さんと同年代の方々の参加が多かった。御影高校においては、これら参加者の方数人にその場で発言していただき、短い時間ではあったが、生の戦争・空襲体験をお聞きすることもできた。この世代の皆さんにとって体験を語る場や機会というのは、実際にはめったにないのではあるまいか。戦争を知るお年寄りたちが徐々に少なくなるなか、語る側にとっても聞く側にとっても、こういう場や機

会を設けて体験を継承していくことが、この時代に求められているとあらためて感じた。

なお、一般参加者のほか、神戸新聞や毎日放送ラジオなどマスコミ関係の参加もあり、当日の様子がそれぞれ後日報道ないし放送された。

最後にこの場を借りて、暑いなか2日間の企画を手伝ってくださったボランティアの皆さんならびに、一連の水害対応に忙殺されるなか告知・受付にあたってくださった史料ネット事務局の皆さんに、感謝申し上げます。

(つじかわ あつし、

史料ネットボランティア)

見学記

国立歴史民俗博物館

「ドキュメント災害史 1703 - 2003 地震・噴火・津波、そして復興」

内海寧子

昨年夏、千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館では「ドキュメント災害史 1703 - 2003 地震・噴火・津波、そして復興」が開催された。まだ暑さの残る9月10日、災害史の展示という珍しい企画への興味と、災害からの復興というテーマに惹かれ、同館に足を運んだ。

さて、この展示はタイトルが率直にその内容を示しているように、江戸時代から近代はじめまでの歴史上の災害を取り上げ、津波・噴火・地震・復興のセクションに区切って災害のメカニズムや人々の対応を展示し、また、歴史災害と現代をつなぐ視点として、1995年の阪神・淡路大震災にも触れられたものであった。以下、感想を述べ

てみたい。

今回の展示の大きな特徴は、理系研究者と文系研究者が同じテーブルについて創りあげた展示であるということだ。災害史という分野の性格を考えれば、両者の立場から検証し、展示を企画していくことは重要なことであり、またそれがこの展示の魅力となっていた。展示の一例をあげてみよう。富士山・宝永噴火の展示では、コンピューターグラフィックによる映像で、富士山の噴火と噴火による降灰の様子が映し出される。それと平行して、被害の大きかった須走村の降石・降灰状況を示す記録、被害を受けた村々が代官に提出した普請の嘆願書等の記録から復興の様子が展示されている。

被災地域を訪れたことがないものには、その土地のイメージがつかみにくく、また災害状況を描いた絵図だけではその実態は把握しきれない。しかし、映像で災害を再現することにより、被災地域と災害の様子が把握でき、それをふまえた上で、歴史的諸記録にあたることができるため、文字や絵画という媒体から人々の姿をより鮮明に浮き彫りにすることが可能になる。

このような理系研究と文系研究、両者の立場からみた展示の有効性を感じつつも、博物館展示における両者のバランスの難しさも感じた。災害の復元を映像でみせることは、前述したように自然のメカニズム理解、災害の実態把握に効果的である。しかし、自然メカニズムの把握から一歩進んで、災害に遭遇し、そこから生きていく人々の姿、地域社会の姿をも提示することに災害史展示の意義が見出されるのであろう。災害の恐ろしさを人々に示し、防災意識を高めることも重要な点であるが、いたずらに恐怖心を煽るものであってはならないし、また展示を見る者も災害の実態を見つめ、そこから記録をどのように読み取るか意識することが大切だと感じた。

また今回の展示では、歴史的災害の検証だけでなく、災害からの復興にも眼が向け

られている。この復興セクションは歴史的資料を中心に、災害から立ち直る人々の姿を描き出すことを目的としているが、復興に向けた様々な取り組みを取り上げたもの、鯨絵・ボランティアという素材を通し、災害に直面した人々がたくましく生きる姿を示したものの大きく二つに分けられた展示であった。特に阪神・淡路大震災の展示では、震災から8年が経過した2003年時点でのボランティアへのインタビュー映像が展示され、一人一人の人間が災害に関わった様子が取り上げられている。災害展示全体の中でも「人」がクローズアップされている所であり、現在から震災ボランティアを振り返ったボランティアの声を聞くことができたが、現代から災害史を逆照射するという意味では、ボランティアだけでなく、被災者の声もからめたものが見たかった。

最後に全体をとおした率直な感想としては、視覚的興味あふれる展示内容に刺激を受け、個々の災害事例と人々の対応についてより詳しく知りたいと感じた。また、展示や解説については、災害を一面的な方向から見せるのではなく、展示から多様な情報や感想を引き出せるチャンネルの多い展示であり、好感をもった。

(うつみ やすこ、関西大学大学院生)

News Letter 記事内容再考のお願い

~ News Letter をより楽しく読むために ~

山田 修 士

震災からはや10年をむかえ、震災と同時に立ち上がった歴史資料ネットワーク(以下史料ネットと略す)も足掛け10年がたち、近年特に全国紙及び地方紙を中心としたコラム欄で歴史資料・文化財の保存、活用についての史料ネットの活動が識者に

取り上げられ、より認識され拡がりを見せていることは大変うれしく心強いことです。

私は神戸に在住の一市民ですが、3年前に当史料ネットの活動を知り会員に入会させていただき、以降史料ネットが主催する各種市民歴史講座・シンポジウムを楽し

みに参加させてもらっております。又年4回送られてくる史料ネットNews Letterも興味深く読ませていただいておりますが、どちらかというとかたい文章での報告・連絡事項の記事が多く、あまり面白く感じられません。できれば、私のような一市民にも良く解かり共感をよぶような「なるほどなあ」「そうゆうことか」というような史料に基づいた記事もシリーズで載せてほしいものです。

例えば、近世後期には西宮から灘区にかけての六甲山麓ぞいに水車がたくさんあり、そこで小麦の製粉がおこなわれ素麺づくりが盛んで、それが播州に伝わり「揖保の糸」になったとか、同じく近世後期には池田から西灘にかけての西摂地方で酒造業が盛んで、年間数十万樽の酒が江戸に送られていたが、その酒を入れる容器の木製の樽は主に阪神間で作られ、又樽のかける菰は主に尼崎近辺の農村で作られ、今でも一部伝統産業として残っている。中世では、湊川の戦い（1336年）で新田義貞が生田の森から東に敗走し討ち死にしそうになった時に、以前関東で恩義をうけた小山田太郎高家が身代わりになり討ち死にする場面が太平記に出てくるが、その場所が四世紀に造られた東灘区の乙女塚古墳です。

私達市民の身近に興味ある過去の人々の息づかいが感じられる多くの出来事が埋もれており、未発表のおもしろいネタを多く持っておられる識者の方々が、史料ネットの周辺には多くいらっしゃると思います。

News Letterの企画・編集に取り組んでおられる事務局の方々は、読者

の皆様により満足のいく紙面をつくろうと日夜努力しておられ大変ご苦勞な事と思いますが、私の勝手なお願いをご一考願えればさいわいです。

（やまだ しゅうじ、史料ネット個人会員）

史料ネット個人会員の山田修士さんから投稿記事です。山田さんにつきましては、貴重なご意見をいただきまことにありがとうございました。

News Letterの編集にあたり、会員の皆さまに親しみやすく、読みやすいものにしようと努力を重ねておりますが、まだまだ改善の余地はありそうです。例えば前々から指摘されている文章の「固さ」。内容にもよりますが、市民講座参加記などについては、記事執筆依頼の際に編集担当からできる限り柔らかい文章で執筆いただけるように編集担当から一言添えるなどの工夫をしていきたいと思ひます。

また、地域の歴史に関するシリーズものの連載についてですが、現在不定期連載中の「震災史料整理便り」はこうしたご要望に少しでもお答えできるよう企画したものです。できればもっといろいろな時代を幅広く取り上げたいとは考えているのですが、定期連載となると執筆担当を見つけることが予想以上に難しく、残念ながら実現にはいたっていません。個人的には会員の皆さまから広く記事の投稿を募り、皆さまの手で一つのコラムページを作り上げていくのも一つの手かな、と考えておりますが、いかがでしょうか。

事務局ではNews Letterについての感想や「こうしたものが読みたい！」というご希望など会員の皆さまからの声をどんどんいただきたいと思っております。それらを参考にしつつ、今後より一層魅力ある誌面作りに取り組んで参りますので、ご協力のほどよろしくお願ひいたします。

（以上文責、河野未央）

福井史料ネットワークの被災

史料調査活動の現状

～水害による被災の特徴～

松下 正和

[募金の現況]

歴史資料ネットワークは、8月9日発行のニュースレター特別号で、福井豪雨による被災歴史遺産保全活動と支援募金へのご協力をお願いいたしました。その結果、会員の皆様をはじめとして多くの方から支援募金をいただき、現段階(8/28)で、339,133円が集まっています。ご支援いただいた皆様に福井史料ネットワークの活動状況をご報告することで、お礼にかえさせていただきます。

[福井ネットの調査活動概要]

福井史料ネットワークが立ち上がる経緯や、第1回目の現地被災調査(8/1実施)については、前号のニュースレターや歴史資料ネットワークのホームページ(http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~macchan/fukui_suigai.htm)をご覧ください。8月以降、福井県文書館、福井県立図書館、福井県立歴史博物館、織田町歴史資料館の職員・学芸員の方や、福井大学・敦賀短期大学・金沢大学の教員・院生・学生を中心としたメンバーで被災史料調査を行っています。以下では、第2回以降の被災史料現状確認調査について、福井史料ネットワークのメーリングリスト上での活動報告をもとに、概要を述べていきたいと思えます。

【第2回】

実施日は8/4(水)、調査地は今立町服間地区、参加人数は2名。調査件数は12件で、いずれも被害報告はなしとのこと。

【第3回】

実施日は8/8(日)、調査地は今立町西庄境・東庄境・新堂、参加人数は2名。東庄境・新堂については床上浸水が多く、聞き

取り調査も困難な状況。床下浸水が多かった西庄境の資料については区有文書を含めて無事。

【第4回】

実施日は8/9(月)、調査地は今立町粟田部地区16軒、参加人数は3名。不在の家、史料の存在を知らなかった家をのぞく全ての家で史料の無事を確認。

【第5回】

実施日は8/10(火)、調査地は池田町、参加人数は2名。池田町教育委員会から町内の現況説明を受け、巡検調査をおこなう。池田町教委から事前に被災状況についての説明をうける。それによれば、全域で豪雨被害が発生しているものの、家屋倒壊・床上浸水など重大な被害は、旧下池田地区(野尻・清水谷・持越・白粟・松ヶ谷・下小畑・上小畑・千代谷・金見谷・大本など)に集中、上記以外の地域では歴史資料の存亡にかかわる被災はなし。上記の地区中、I・T家が土蔵全壊・家屋もほぼ全壊状態で資料の存亡も不明であること以外は、歴史資料の被災はなし。西青・割谷・河内・田代・尾緩・籠掛・稗田・猶俣・杉谷の各地区は、すでに廃村(1980年前後～)で、歴史資料所蔵者も他出していて資料の存亡等未確認である、とのこと。午後から、池田町の教育長・課長とともに被災地を巡検。T・Y家(小畑)では、資料の現況を確認。当家では土蔵も床上浸水したものの、古文書等の資料は2階にあったため、難を免れ、生活復旧作業の傍らながら古文書の曝涼にも着手。I・T家では、土石流が1階部分を貫通し、2階に保存されている書籍等の搬出が可能か憂慮される状況。土蔵は完全に

倒壊し、どの程度の救出が可能か不明。解体時には要注意。I・T 家に隣接する Y・S 家も床上浸水。歴史資料は無事とのこと。

【第6回】

実施日は 8/11 (水) 調査地は今立町服部川の谷筋集落、参加者は 3 名。

服部川上流から下流にかけて 19 家 (うち 2 軒は不在) を訪問。どの家も史料は無事とのこと。多くの家で当主が不在で、史料の現物にあたることはできないも、床下浸水の状況から見て、史料に被害はなかったものと判断。服部谷領家の区長 T・K 家は床上浸水だが、「区有文書は大切なので運び出して無事」とのこと。春山の H・M 家で、柳行李 1 つ、ビニール袋 4 つに近世後期から明治期の横帳・一枚物が納められていた文書 (寛政以降の年貢割付状 26 点、年貢小物成帳など 30 冊、村入用帳など 40 冊など) あり。これらは今立町の文書目録には全く載せられていない「新発見」の文書であることが判明。大切に保管するよう依頼。

【第7回】

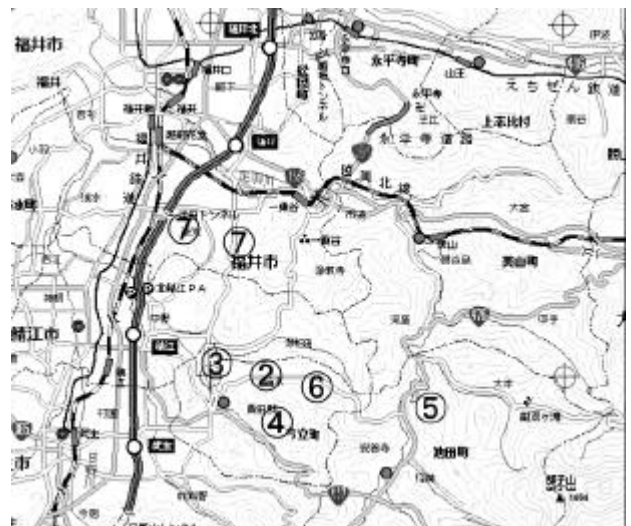
実施日は 8/23 (月) 調査地は福井市上文殊地区 53 件、調査参加者は 6 名。3 名 2 チーム編成で調査に入る。

長野栄俊チームの所見 対象地域は、西大味町・東大味町・生部町・西袋町の 4 地区、24 件。いずれの地区も床下床上浸水に加え、山の斜面がズレ落ちるなどの被害を受けた地区。もともとの立地がよく、家屋への浸水の無かった所蔵者宅が何件もあり。東大味町の位置する谷奥は被害が大きかったようだが、家屋への浸水があったお宅 (縁板を剥がし中) でも、文書は蔵にあって無事というお宅が 2 件あり。その一方で、文書の所在がわからない、というお宅があったことが印象に残った。

「私たちの調査をきっかけに、史料のことを思い出してもらえれば、現地調査にも何

らかの意味があるのでは」、「自治体史の編纂のあり方 (アフターケア) についても反省する点はあるようだ」とのこと。

高木久史チームの所見 対象地域は、帆谷町・大村町・北山町・北山新保町・徳光町・岩倉町・田治島町の 7 地区 27 件 (うち不在等聞き取りができなかったところ 5 件)。被害状況は、床上・床下浸水や山崩れなどが一部あるも、資料についての明らかな被害は確認できず。文書の所在自体を認識していないところが大多数。逆に県史等の調査が入っている所蔵者は保存に対する意識が高いところが多く、「蔵に入っていて大丈夫」「金庫に入っていて大丈夫」等の回答を得た。またそういうところはそもそも立地的にも被害が無いもしくは軽微という印象を受けた。一方で、集落の神社や寺院では、土砂崩れのためかなりの損壊を受けており、浄教寺地区 (一乗谷の上流、被害がかなり大きかった) では文書所蔵家 (?) が流された、との情報もあり確認中とのこと。



(丸数字は調査回数をあらわす)

[水害による被災の特徴]

今回の福井豪雨での経験を通じて、水害による被災は、これまでの地震による被災とはいくつかの点で違いがあることがわかりました。

まずは、水害の場合、史料の滅失の早さ

があげられます。土石流で流されるケースや、水損しても復元可能であることを知らず処置に困ってゴミ処分の際に廃棄される可能性があります。史料ネットでは、新聞社に対し、水損史料を廃棄しないよう呼びかける記事を掲載していただきました。また、史料所蔵者は、史料の所在や重要性がわかっているにもかかわらず、被災地外部からの災害復興ボランティアによって泥かきなどの復旧作業が行われる場合、誤って廃棄される懸念が指摘されていました。そこで、史料ネットでは、福井県内のボランティアセンターに対し、保全してほしい歴史的・文化的資料を具体的に示し、汚損しても性急に廃棄せず、まず所蔵者や県文書館などに相談するように呼びかけるFAXを送付しました。このような災害復興ボランティアに対する呼びかけは、今回が初めてのことでした。幸い、福井のケースでは保存場所が高台にあったことや、所蔵者があらかじめ史料を避難させたことにより、滅失例は今のところ確認されていません。

次に、水害による史料の被災は、単純な水濡れだけではなく、泥水に浸かったことで汚損やカビの害をもたらします。たとえ直接の浸水被害はなくても、蔵・納屋・押入の湿度があがり、夏場では特にカビが生えやすくなっていることが予想されます。今回だけでなく、6年前にも蔵が浸水し、中を整理していないお宅もありました（今立町M家）。今回被害がなかった所蔵者宅も含めて虫干しや除湿・防カビの方法など適切な処置を所蔵者に伝える必要を感じました。今回は、幸いにも大量かつ激しい汚損史料はまだ出てきていませんが、今後仮に汚損史料が大量に出た場合、汚損に応じた適切な凍結処置、レスキュー人員の確保、凍結場所の確保、中性紙封筒・ビニール袋

などの資材の確保、復元処置としての乾燥機関の確保などが問題となってきます。福井県内には敦賀短期大学や県文書館のような修復にも対応しうる機関がありましたが、新潟・福井豪雨発生直後から、京都造形芸術大学の尾立和則氏や、NPO文化財保存支援機構などから、被災地の文化財救援協力の申し出が史料ネットにありました。史料ネットとしても、文化財修復関係機関との連携をますます強めていきたいと考えています。

これまでも、埼玉県草加市の民間所蔵古文書（1992年12月）や、栃木県西那須野町郷土資料館（1993年10月）など消火活動や水漏れに伴う水損史料の救助例はいくつかありましたが、今回の新潟・福井豪雨のような広域にわたる水害による汚損史料の調査・救助例は珍しいケースではないかと思えます。今年に入り、台風による被害も増えています。これら過去の災害事例に学びつつ、来る災害への危機管理対策を更に検討し情報発信したいと思えます。会員の皆様におかれましても、自館史料や地域史料が被災した場合を想定し、レスキュー方法を今一度再点検していただき、また救助マニュアルがある場合は、私どもまでご教示いただければと思えます。

[引き続き、ご支援のお願い]

福井史料ネットワークの活動は現在も進行中です。史料ネットホームページには、福井史料ネットワークによる活動の中間総括もアップしています。これらをご参照の上、ボランティア登録や募金など皆様からの様々なご支援を引き続きお願いいたします。

（まつした まさかず、
史料ネット事務局長）

福井豪雨 被災史料救出活動支援募金

(下記のいずれの口座でも受け付けています)

福井史料ネットワーク口座

銀行名：福井銀行文京支店

名義人：福井史料ネットワーク代表松浦義則

口座番号：普通 1177518

歴史資料ネットワーク口座（郵便振替）

口座番号：00930-1-53945

加入者名：歴史資料ネットワーク

振替用紙に**福井カンパ**とお書きください

災害ボランティア登録について

住所、氏名、年齢、所属、電話（自宅と携帯）、メール、参加可能な日程（9/15以降）をお書き添えの上、歴史資料ネットワークまで FAX（078-803-5565）か E-Mail（s-net@lit.kobe-u.ac.jp）を送信してください。

<宮城県北部連続地震カンパのお礼>

2003年7月に発生しました宮城県北部連続地震に際し、小泉健太様から史料ネット宛カンパをいただきましたので、ご報告いたします。ご協力ありがとうございました。2004年8月段階で、合計312,639円集まりました。既に全額を宮城史料ネットに送金済みです。）



まは、わかお過ごしでしょうか？今回は史料ネット総会とシンポジウム特集号です。限りある時間の中ではありましたが、総会・シンポジウムともに当日は非常に活発な議論が繰り広げられました。ご精進いただければと思います。（こ）

編集後記

連日のオリンピック報道ですっかり寝不足の今日このごろです。皆さま

個人会員への入会と“News Letter”購読のお願い！

史料ネットの活動に平素からご協力いただき、ありがとうございます。

歴史資料ネットワークは、改組後も引き続き“News Letter”を年4回発行いたします（年間購読料：郵送費込み1000円）改組とともに今後内容を更に充実させる努力を重ねて参ります。皆様方には引き続きご購読いただきますよう、よろしくお願ひ致します。また、表題にもありますように、ニュースレター会員・贈呈読者の皆様には是非とも個人会員へのご入会（年会費：個人会員5000円、学生・院生会員は半額）ないしサポーター（一口3000円以上）としてご支援いただき、史料ネットの発展にご理解・ご協力を賜りますよう、宜しくお願ひ申し上げます。

史料ネット 郵便振替口座

名義：歴史資料ネットワーク

口座番号：00930-1-53945

史料保存関係のホームページ“Archivist in Japan”を開設している小林年春さんのご協力により、史料ネットの情報を同ホームページに連載していただいています。<http://www.archivists.com/> または <http://member.nifty.ne.jp/archivists.com/> または <http://www.asahi-net.or.jp/~hm7t-kbys/archivists/>

史料ネット NEWS LETTER No.38 発行 2004年9月3日

編集・発行 歴史資料ネットワーク

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 神戸大学文学部地域連携センター気付 史料ネット神戸センター

TEL&FAX:078-803-5565（開室時間 平日の午後1時～5時）

URL:<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/> macchan/ e-mail:s-net@lit.kobe-u.ac.jp